

る。これによって、読者には窮まりない利益を、医学に対してはいささかの貢献をなしうると考える。  
時に宋の紹興二十五年五月十五日 錦官の史崧<sup>しすう</sup> 題す

(白杉悦雄 訳)

## 九鍼十二原篇 第一

【解題】  
本篇では、主に、古代にあったとされる九種類の鍼の名称・形状・用途と、刺鍼の際の疾・徐・迎・随・開・闔などの手法と、補瀉の効果について説明する。併せて、肘・膝・胸・臍などに分布する左右、正中を合わせて十二の原穴と、蔵府の疾病によってそれら十二の原穴を使い分ける治療方法について述べる。そこで、この篇を「九鍼十二原」と名づける。

黄帝問於岐伯曰、余子万民、養百姓、而収其租税。余哀其不給、而属有疾病。余欲勿使被毒藥、無用砭石、欲以微鍼通其経脈、調其血氣、營其逆順出入之会。令可伝於後世、必明為之法、令終而不滅、

黄帝 岐伯に問いて曰く、余万民を<sup>①いづく</sup>子しむ、百姓を<sup>②ひまぐばい</sup>養い、而して其の租税を収む。余其の給ら<sup>③た</sup>ずして、属<sup>④つらね</sup>て疾病あるを哀しむ。余毒藥を被らしむることなく、砭石<sup>⑤いんせき</sup>を用いることなからしめんと欲し、微鍼を以て其の経脈を通じ、其の血気を調べ、其の逆順出入の会を営なましめんと欲す。後世に伝うべく、必ずこれを為す法を明ら

久而不絶。易用難忘、為之経紀、  
異其章、別其表裏、為之終始、令  
各有形。先立鍼経。願聞其情。

かにせしめ、終わりにて滅せず、久しくして絶えざらしめん。  
用い易く忘れ難く、これが経紀を為し、其の章を異にし、  
其の表裏を別ち、これが終始を為し、各おのをして形あ  
らしめん。先に鍼経を立てん。願わくは其の情を聞かん。

【注釈】

- ① 子—愛する、慈しむという意味。
- ② 属—連続して、引き続きという意味。
- ③ 毒薬を被る—「被」とは、受けるという意味。「毒薬」とは、治療に使う薬物の総称である。汪機わうきの説「それで病を攻めることができるものは、みな毒という」。
- ④ 砭石—古代、疾病を刺して治療するのに用いた尖った石。
- ⑤ 経紀—筋道、順序という意味。

【現代語訳】

黄帝が岐伯に問う。「私は万民を慈しみ、百姓を養い、彼らから租税を徴収している。私は彼らの生活が自給出来るものでなく、さらには連続して疾病が発生しているのを哀れに思う。彼らの疾病の治療にあたって、私は薬物と砭石とを使うことなしに、微鍼を用いて経脈を通じさせ、気血を調和させ、経脈中の気血の往来、出入や会合を正常に回復させたいと考える。同時に、こうした治療方法を後世に残し、鍼治療の道理を明らかにし、それを永遠に滅びることなく、久しきにわたって伝わるようにさせたいと思う。容易に運用できてかつ忘れにくく

させるために、筋道をはっきりさせ、章節を区分し、表裏を弁別し、始めから終わりまで理論と実践とを一貫させ、併せて九鍼のそれぞれの形状をはっきりと記したい。そのために、まず『鍼経』を作らねばならぬ。私はこの問題について、あなたの意見を聞きたい」。

【訳注】

- (一) この部分、「必明為之法令、終而不滅」と断句する説がある。楊上善が「法令とは、即ち針経の法なり。」と注釈したのに始まるものであるが、ここでは原訳(『靈枢訳釈』)によって句点を施し、「令」を使役として後の句に掛けて読んだ。

岐伯答曰、臣請推而次之、令有  
綱紀、始於一、終於九焉。請言其  
道。小鍼之要、易陳而難入。麤守  
形、上守神。神乎、神客在門。未  
睹其疾、惡知其原。刺之微、在速  
遲。麤守関、上守機。機之動、不  
離其空。空中之機、清静而微。其  
来不可逢、其往不可追。知機之道  
者、不可掛以髮。不知機道、叩之

岐伯答えて曰く、臣請うらくは推してこれを次し、綱  
紀あらしめ、一に始まり、九に終わらしめん。其の道を  
言わんことを請う。小鍼の要は、陳べ易くして入り難  
し。麤は形を守り、上は神を守る。神なるかな、神客門  
に在り。未だ其の疾を睹ざれば、悪くんぞ其の原を知ら  
ん。刺の微は、遅速に在り。麤は関を守り、上は機を守  
る。機の動は、其の空を離れず。空中の機、清静にして  
微なり。其の来たるや逢うべからず、其の往くや追うべ  
からず。機の道を知る者は、掛くるに髮を以てすべから

不発。知其往来、要与之期。麤之  
闡乎。妙哉、工独有之。往者為逆、  
來者為順、明知逆順、正行無間。  
逆而奪之、惡得無虛。追而濟之、  
惡得無実。迎之随之、以意和之、  
鍼道畢矣。

ず。機の道を知らざれば、これを叩くも発せず。其の往  
來を知りて、これに与あずかるの期を要もとむ。麤この闡あなるかな。  
妙なるかな。工独りこれあり。往ゆく者ものを逆と為し、來き  
る者ものを順と為し、明らかに逆順を知れば、正行して問う  
ことなし。逆さかいてこれものを奪うわば、悪わるくんぞ虚うつなきを得ん。  
追おいてこれものを濟すわば、悪わるくんぞ実まなきを得ん。これを迎  
え、これに随まひ、意いを以てこれを和なすれば、鍼道あ畢はわれり。

【注釈】

- ① 小鍼——また「微鍼」とも称する。現代の毫鍼である。
- ② 陳ちんへ易えきく入り難し——張介賓の説「陳ちんへ易えきしとは、常法は言い易いということ。入り難しとは、精微で及びがた  
いということ」。
- ③ 麤こは形を守る——「麤こ」は、ここでは粗工を指す。技術の低劣な医家のことである。馬蒔の説「下工は形と跡  
のみに拘り、徒に刺法を守るだけである」。
- ④ 上かみは神を守る——「上かみ」は、ここでは上工を指す。技術の高度な医家のことである。馬蒔の説「上工は人の神を守る。  
およそ人の血気の虚実じよじつは、補うにも瀉すにも、ただ神を中心とする。この鍼の方法を用いるだけではないのである」。
- ⑤ 神かみなるかな、神客かみかく門かどに在り——多紀元簡の説「小鍼解篇に、『神客かみかくとは、正邪せいじやが共にあること。神は、正気せいきで、  
客かくは邪気じやきである。門かどに在りとは、邪じやが正気せいきの出入するところにしたがうことである』とある。この説によれば、  
神平かみへいの二文字で句である。神客かみかくとは、神と客との意味である」。
- ⑥ 麤こは関かみを守る——技術の劣る医家は、ただ四肢の關節の周囲の經穴の治療のみを墨守する。

- ⑦ 上かみは機かみを守る——「機かみ」とは、氣の動靜を指す。「上かみは機かみを守る」とは、技術の高度な医家は、經氣の往来の動  
靜を待ち、補虚瀉実の刺法を施すことをいうのである。
- ⑧ 其そのの空くうを離れず——「空くう」は、孔あなのこと。經穴を指す。「其そのの空くうを離れず」とは、氣の往来は、經穴を離れないと  
いうこと。
- ⑨ 其そのの來きたるや逢あうべからず——邪氣じやきがまさに盛んな時期には、迎えて補ってはいけないということ。張志聡の説  
「その氣がまさに來ようとするとき、邪氣じやきはまさに盛んである。邪氣じやきが盛んであれば、正氣せいきははなはだ虚した状  
態になる。その氣の來るのに乗じて、すぐに迎えて補ってはいけない、邪氣じやきの來るのを避けるべきである」。
- ⑩ 其そのの往ゆくや追おうべからず——邪氣じやきが衰えて、正氣せいきがまだ回復してはいない時に、瀉法を用いてはいけないというこ  
と。張志聡の説「正氣せいきが行き、邪氣じやきがすでに衰えて、正氣せいきが回復しようとするときは、その氣の行くのに乗じ  
て、追おって瀉法を施してはいけない。正氣せいきを害がいなう恐れがある。氣の往来の機微かみびをとらえるべきである」。
- ⑪ 闇くら——暗の異体字。愚昧で明らかでないこと。
- ⑫ 往ゆく者ものを逆と為し、來きる者ものを順と為す——「往ゆ」とは、氣の去ることをいい、「來き」とは、氣の至ることを言う。  
張介賓の説「往ゆは、氣が去ること、ゆえに逆という。來きは、氣が至ること、ゆえに順という」。

【現代語訳】

岐伯が答える。「それでは私の知っているところを、順を追って説明させていただきます。このようにしてこそ、条理  
が生まれ、一から九まで、終始の順序が乱れないのです。まず刺鍼による治療の一般的な道理についてお話ししましょう。  
小鍼による治療の要点は、話すことは比較的易しいのですが、技術が精微な境地にまで及ぼうとすると、かなり困  
難なのです。技術の未熟な医家は、ただかたちのみに拘って、変化を知りませんが、高度な技術を持つ医家は、病人  
の神氣の盛衰に基づいて、補瀉の手法を使うことが出来ます。血氣が經脈を循行していく過程で、その出入には一定

の門戸があり、邪気はその門戸から人体に侵入しようとするのに、医家が詳しく病状を見ないで、どうして病変の發生する原因がわかるでしょうか。

鍼の技術の要は、刺鍼の部位が適當であることと徐疾の手法の正確な運用にあります。技術の未熟な医家は、四肢の關節付近の経穴を墨守して治療するだけです、高度な技術を持つ医家は、経気の動靜を觀察し、虚実の変化を洞察するのです。経気の循行は、経穴を離れることはありません。邪気は経気の流動にしたがって動くものであり、経穴に表れた経気の虚実の変化は清静微妙なもので、細心の注意が必要です。邪気が盛んなときは、決して補法を用いてはなりません。邪を留めるのを防ぐためです。邪気がすでに去って、正気が衰えているときには、決して瀉法を用いてはなりません。正気を害なうのを防ぐためです。気の働きの虚実変化を理解すれば、補瀉の手法を正確に運用でき、毛筋ほどの間違ひも起きるようなことがありません。気機の虚実の変化を理解しなければ、弦上の矢が、正確な時期をはずして放たれるようなもので、補瀉の手法を乱用すると、当然治療目的を達成することが出来ません。ですから、気の往来の時期を理解してはじめて刺鍼の正確な時間を理解できるのです。未熟な医家はこのことになんとからく無知なことでしょうか。また気の往来を知ることのなんと精妙な技術でありましょうか。高度な医家のみがこのことを把握できるのであります。

気が去るとき経脈が空疎になるのを『逆』、気が来るとき経脈が充実するのを『順』といいます。逆順の理屈を解つてこそ、大胆に法に従つて刺鍼することが出来るのです。経脈の循行方向に迎つて瀉法を施すことができればどうして実邪を泄することが出来ないようなことがありましょうか。経脈の循行方向に従つて補法を施すことができれば、どうして正気を強化出来ないようなことがありましょうか。以上のように、迎隨補瀉の方法を正確に把握し、さらに入念に觀察するならば、刺鍼の主要な道理は、この中に尽くされているのであります。

### 【訳注】

(一) 今は原訳に従い、「神乎、神客在門。」と読んでおく。小鍼解篇の断句がこの読み方を取る。もう一つ、『素問』八正神明論篇・『太素』本神論に「神乎神」という句が見えることを根拠に「神乎神、客在門。」と読む説もあり、句読上からはその方が無理がない。

凡用鍼者、虚則実之、滿則泄之、宛陳則除之、邪勝則虚之。大要曰、徐而疾則実、疾而徐則虚。言実与虚、若有若無。察後与先、若存若亡。為虚与実、若得若失。

虚実之要、九鍼最妙。補写之時、以鍼為之。写曰、必持内之、放而出之、排陽得鍼、邪气得泄。按而引鍼、是謂内温、血不得散、氣不得出也。補曰、隨之隨之、意若妄之。若行若按、如蚊虻止、如留如還。去如絃絶、令左属右、其氣故止、外門已閉、中氣乃実、必無留

凡そ鍼を用うる者は、虚なれば則ちこれを実し、滿つれば則ちこれを泄し、宛陳なれば則ちこれを除き、邪勝れば則ちこれを虚す。大要に曰く、徐にして疾なれば則ち実し、疾にして徐なれば則ち虚すと。実と虚とを言わば、有るが若く無きが若し。後と先とを察れば、若しくは存ち若しくは亡う。虚と実とを為さば、得るが若く失うが若し。

虚実の要は、九鍼最も妙なり。補写の時、鍼を以てこれを為す。写に曰く、必ず持してこれを内れ、放ちてこれを出だし、陽を排して鍼を得れば、邪気泄するを得ず。按じて鍼を引く、是を内温と謂う、血散するを得ず、氣出づるを得ざるなり。補に曰く、これに隨ひこれに隨う、意これを妄りにするが若し。若しくは行らし若し

血。急取誅之。

持鍼之道、堅者為宝。正指直刺、無鍼左右。神在秋毫、属意病者。審視血脉者、刺之無殆。方刺之時、必在懸陽、及与両衛。神属勿去、知病存亡。血脉者、在膺横居、視之独澄、切之独堅。

くは按じ、蚊虻の止まるが若く、留まるが若く還るが若し。去ること絃の絶ゆるが若く、左をして右に属したがわしめ、其の氣故に止まり、外門すて已に閉じ、中氣乃ち実し、必ず留血なからん。急ぎ取りてこれを誅す。  
持鍼の道は、堅なる者を宝と為す。正しく指して直刺し、鍼の左右するなかれ。神は秋毫に在り、意を病者に属す。審らかに血脉を視る者は、これを刺して殆あやうきことなし。刺すの時に方あたりて、必ず懸陽⑩と両衛⑪とに在り。神属して去ることなければ、病の存亡を知る。血脉なる者は、膺しよの横居に在り、これを視れば独り澄み、これを切すれば独り堅し。

### 【注釈】

- ① 宛陳なれば則ちこれを除く——「宛陳なれば則ちこれを除く」とは、血氣が滞って日が経つたものは、これを排除すべきであるということである。  
大要——古經の篇名である。
- ② 徐にして疾なれば則ち突——鍼をゆっくり刺入し、素早く抜き去り、鍼を抜き出して急ぎ鍼孔を按ずる方法で、補法に属する。
- ③ 疾にして徐なれば則ち虚——鍼を素早く刺入し、ゆっくり抜き取り、鍼を抜き出して鍼孔を閉じない方法で、瀉法に属する。

法に属する。

- ④ 実と虚とを言わば、有るが若く無きが若し——鍼下に氣が有るものを「実」といい、鍼下に氣が無いものを「虚」という。張介賓の説「実と虚とは、氣の有無によるものである。氣はもともと形がないので、有るがごとく無きがごとくという。よくこれを見極めるものは、有無の間をすぐれて理解する」。
- ⑤ 後と先とを察す——疾病の緩急を見極め、治療の前後の順序を決定すること。
- ⑥ 若しくは存ち若しくは亡む——氣の虚実に基づいて、鍼を留めるかどうかと、鍼を留める時間を決定すること。「若」とは、或いはの意味。
- ⑦ 得るが若く失うが若し——刺鍼の補瀉の作用を形容したもの。実証であれば、瀉して除くため、患者が失ったものがあるようになる。虚証であれば、補つて実するため、患者が得たものがあるようになる。
- ⑧ 放ちてこれを出す——鍼孔を大いに揺らして、邪氣を排出させること。
- ⑨ 陽を排して鍼を得——三種類の解釈がある。  
一、陽とは、皮膚の表層の部位を指す。表層の部位を排して、邪氣を鍼にしたがって外に排泄する。  
二、陽とは、表陽を指す。表陽を排して、邪氣を去るのである。  
三、陽を排すを、押し上げると解釈する。孫鼎宜の説「排陽とは、推揚の意味で、鍼を捻ること。鍼を捻れば、邪は自ずとそれにつれて出てくる」。
- ⑩ 内温——「温」は、蘊に同じ。氣血が内に蓄まること。
- ⑪ 意これを妄りにするが若し——思い通りにして、心を配っていないかのようなこと。
- ⑫ 若しくは行らし若しくは按ず——「行」とは、鍼を行らし氣を導くこと。「按」とは、經穴を按じて鍼を刺すこと。
- ⑬ 左をして右に属がわしむ——右手で鍼を抜き、左手で急ぎ鍼孔を押さえること。
- ⑭ 堅なる者を宝と為す——鍼を刺す時、鍼を持つに必ずかたく力を入れるべきことを言う。
- ⑮ 意を病者に属す——患者に精神を集中させることを指す。